◉もくじ

中央アジアの歴史と現在

草原の叡智

まえがき◎アルタイ・天山からモンゴルへ……松原正毅—4

総論◎シルクロードと一帯一路……松原正毅—32

中央ユーラシア史の私的構想——文献と現地で得たものから……堀　直—50

中央アジアにおける土着信仰の復権と大国の思惑——考古学の視点から……林　俊雄—70

SAMPLE

聖者の執り成し
——何故ティムールは聖者の足許に葬られたのか……濱田正美—94
オドセルとナワーンの事件（一八七七年）から見る
清代のモンゴル人社会……萩原　守—118
ガルダン・ボショクト・ハーンの夢の跡
——英雄の歴史に仮託する人びと……小長谷有紀—133
描かれた神、呪われた復活……楊　海英—148
あとがき……小長谷有紀—166

SAMPLE

［まえがき］

アルタイ・天山からモンゴルへ

松原正毅

ソビエト連邦解体と一九七九年

一九九一年十二月二十五日に、ソビエト連邦は解体した。それにさきだつ同年八月三十一日にキルギスタン、九月一日にウズベキスタン、九月九日にタジキスタン、十月二十七日にトルクメニスタン、十二月十六日にカザフスタンなどの中央アジア諸国が独立する。ソビエト連邦の解体にいたる兆候は、すでに数年前から数おおくあらわれていた。数おおくの兆候がみられていたにしても、ソビエト連邦の解体がどの時期にどのような形で現実化するかということを、事前に把握していた人はほとんどいなかったといってよいだろう。ソビエト連邦の解体をはやくから予見していたという主張は、それが現実化した後から続出している（**写真1**）。

わたし自身がソビエト連邦の変調を感じたのは、一九七九年十二月二十四日のソ連軍によるアフガニスタン侵攻のニュースをきいたときである。同年の秋から居をともにしていた遊牧民ユルックの冬営地のテントのなかで、トランジスター・ラジオからこのニュースがながれてきた。冬営地は、トルコの地中海沿岸のアンタリア近郊の森林のなかにあった。数日後のドイツからのトルコ語放送のニュース解説のなかで、ソ連のアフガン戦争は短期間で終了するだろうという予測がされた。短期間で終了するという予測の根拠は、アフガニスタンには森林がないのでベトナム戦争のような泥沼化はないというものであった。[1]

この日の夜、近隣のテントから数人のお客さんがあった。アフガン戦争が短期間で終了するという解説をきいて、その場にいた全員が反対の意見をのべた。短期間では終了するはずがないという意見の根拠は、ソ連軍の理不尽な侵攻への復讐の

SAMPLE

連鎖がおこるためというものであった。この復讐の連鎖のためだけではなかったが、その夜の予想の通りソ連のアフガン戦争は短期間でおわることなく十年ちかくの泥沼戦争となった。

ソ連軍のアフガニスタン侵攻には、八派ともいわれるアフガニスタン内の武装勢力が徹底的な抗戦をおこなう。この武装勢力の抗戦の背後で、アメリカやサウジアラビア、パキスタンなどが資金や武器、出撃基地提供の面で大規模な支援をおこなっている。ソ連のアフガン戦争のなかで、タリバーンが生まれ、アル・カイーダがそだっていった。最終的には、一九八九年二月にソ連軍はアフガニスタンから完全撤退し、ソ連は敗北を喫する。

ソ連のアフガン侵攻のはじまった一九七九年は、世界的に激動の年であった。一九七九年二月には、イランのイスラーム革命がおこっている。イランのイスラーム革命の衝撃はおおきく、ソ連のアフガン戦争もイスラーム化の過大な影響を防止するための軍事行動であった面もある。同年四月三日には、中国からソ連に中ソ友好同盟相互援助条約の破棄が通告される。この通告にともなって、中ソ両国のあいだに一触即発の臨戦態勢にちかい緊張がはしった。中国との衝突にそなえるため、ソ連の衛星国の位置にあったモンゴル人民共和国には数十万のソ連軍が進駐し、巨大な軍事基地がいくつももうけられている（**写真2**）。当時、モンゴル人民共和国の首都ウランバートルなどでは、中国軍の侵攻にそなえた避難訓練や防空壕の設置などがさかんにおこなわれたという。

写真1　独立した直後のカザフスタンに残っていたレーニン像（1992年、楊海英撮影）

中国新疆と国境を接するカザフスタンの東部では、中国軍との衝突にそなえた施設や設備がととのえられている。のちの一九九二年八月に新疆ホルゴスから独立まもないカザフスタン東部に入国したわたしたちは、こうした施設や設備のいくつかを目撃した。たとえば、ホルゴス

SAMPLE

写真2　モンゴル国のソ連軍基地廃墟。社会主義が崩壊してからソ連軍は撤退し、基地も遊牧民に破壊された（1997年夏、楊海英撮影）

から入国してまもなく目にする道路は重舗装で、両側に電柱などの妨害物のない軍用機の発着兼用のものであった。当時の首都アルマアタ（現在のアルマトゥ）近郊の青少年用の教育キャンプの宿舎の壁には、中国軍をおもわせる軍隊が侵入してきたときの避難行動や経路のとりかたを図解したパネルが掲示されていた。やはりのちの一九九三年八月に新疆西部の天山山脈のユルドゥズ草原をたずねたとき、道中のあちこちで放棄された軍事施設を目にしている。これらは、いずれもソ連軍との衝突にそなえた中国側の施設である。

さいわいなことに、ソ連と中国の全面的な対決は回避された。その背景のひとつには、ソ連のアフガン侵攻があったわけである。アフガン侵攻に手一杯となったソ連としては、中国との衝突にさく余力がなかったといえるかもしれない。ソ連のアフガン戦争が泥沼状態下にあった一九八五年三月に、ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任した。ゴルバチョフ書記長は、ペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）をスローガンとする内政改革を推進するなかでアフガン戦争の終結の道をさぐる。十年にわたったアフガン戦争は一九八九年二月のソ連軍の完全撤退とともに終結するが、この戦争による深い傷がソビエト連邦に刻まれた。

SAMPLE

一九八九年十一月には、冷戦の象徴ともいえるベルリンの壁が打ちこわされた。約一年後の一九九〇年十月、分裂していた東西ドイツの統一が実現する。冷戦下のなかで継続してきた東欧諸国に対するソ連の支配権は、完全に崩壊した。ソビエト連邦解体にむけた流れは、加速化され激流となってゆく。こうした一連の流れの起点のひとつが、一九七九年十二月のソ連のアフガン侵攻であったといってよいだろう。その意味では、一九七九年はおおきな歴史の転機であったわけである。

こうした歴史の激動のなかで、わたし自身は以前から熱望してきたアルタイ山脈と天山山脈を中心とした地域でのフィールドワークの可能性をかんがえるようになった。「鉄のカーテン」ともよばれるソ連の国境で隔絶された中央アジアと中国新疆にまたがる両山脈を中心とした地域は、一九八〇年代以前は自由な踏査がほとんど不可能な空間であった。「鉄のカーテン」の綻びがみえはじめた一九九〇年にはいって、わたしたちはアルタイ山脈と天山山脈を中心とした地域でのフィールドワークを目ざして、文部科学省の科学研究費補助金の交付申請をおこなうことにした。

アルタイ・天山地域における遊牧の歴史民族学的研究

わたしは、一九七九年九月から一九八〇年九月まで、トルコのトロス（タウロス）山脈西部を中心に遊牧生活をおくる遊牧民ユルックの社会のなかでフィールドワークをおこなっている。その遊牧研究のさらなる展開をはかるため、アルタイ山脈と天山山脈を中心とした地域における調査研究を企画したわけである。アルタイ山脈と天山山脈を中心とした地域は、東アジアにおける遊牧勢力の中核的な役割を担った歴史を内包している。

一九九一年春に、前年度に申請した国際学術調査のための科学研究費補助金の採択が正式に決定した。科学研究費補助金の申請書のタイトルは、「アルタイ・天山における遊牧の歴史民族学的研究」（研究課題番号：03041096）である。この調査研究は、一九九一年度から一九九三年度までの三年計画であった。

一九九一年四月二十四日から二十九日まで、松原正毅（**写真3**）と楊海英（当時総合研究大学院博士課程）が新疆ウイグル自治区の区都ウルムチを訪問した。同年の夏におこなう予定をしていたわたしたちの調査のうけいれについて、公的な協議書をかわすためである。協議書をかわす相手は、新疆科学探険協会であった。当時、この協会の事務所は新疆科学院の内部にもうけられていた。新疆科学探険協会の責任者として協議書のまとめにあたったのは、滕庭康氏と呂銘氏である。三年にわ

SAMPLE

たる新疆での調査活動についての協議書は、無事に双方でまとめることができた。このとき、わたしたちの希望として二年度（一九九二年度）と三年度（一九九三年度）には陸路で新疆からカザフスタンとモンゴルに入国する計画を提示している。この時点ではまだ具現化していなかったが、近い将来に予想されるソビエト連邦解体の後の状況を、国境をまたいで確認しておきたかったためでもある。

一九九一年五月二十二日から七月二十五日まで、第一次調査をおこなった。松原・楊が、先発して新疆にはいっている。新疆では、はじめにジムサル近郊の北庭故城（唐代の北庭大都護府、天山ウイグル王国の首都）をたずねたあと北上してジュンガル盆地を縦断した。この当時、ジュンガル盆地を縦断する舗装道路はなく、四〇〇キロメートル以上走行した自動車の上下動を通じて地表面の凹凸のはげしさを実感している。ジュンガル盆地が、平坦でない起伏に富んだ空間であることがよくわかった。これは、みずから体験してみてはじめて了解できる事象のひとつといえる。

ジムサルから北上して、アルタイ山脈南麓のキョクトガイ（富蘊）についた。キョクトガイからは、ひたすら長大なアルタイ山脈南麓ぞいの道を西へアルタイにむかう。アルタイから北西一五〇キロメートルのトゥルガイトまではいると、アルタイ山脈の懐深くに達する。トゥルガイトは、カザフのなかのケレイ集団の夏営地である。トゥルガイトからは、主要な交通手段は騎馬だけになる。広大で緑豊かな盆地状の草原が、環のようになって山なみのむこうまでいくつもつらなっている。ここは、カザフの人たちを主とした遊牧の世界である。トゥルガイトを中心とした地域で、石人や遺跡をたずね、おおくの人たちから遊牧の現状や歴史についてまなぶことができた。トゥルガイトには、第一次調査の後半にあたる七月初旬にも再訪して滞在している。

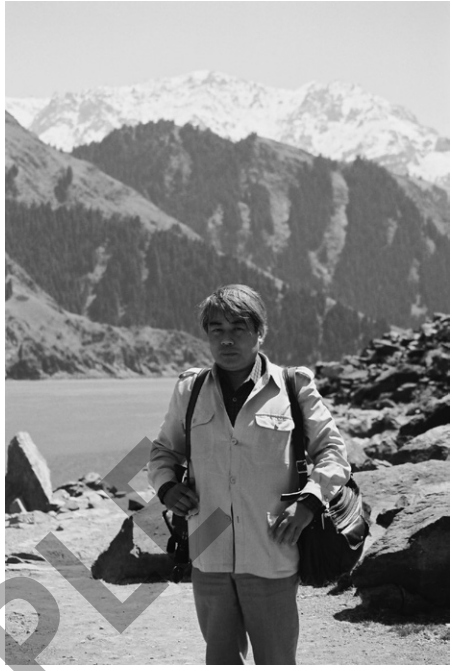


写真3　1991年春に予備調査で新疆ウイグル自治区に入った時の一枚（松原）。背後に天山の雪がみえる　（楊海英撮影）

SAMPLE

トゥルガイトからアルタイにでたあとは、約三週間をかけてブルジン、ホボクシル、タルバガタイ、ボルタラ、イリなどをめぐった。この旅でも、石人や岩画、城跡などをたずね、カザフやウイグル、ウズベク、モンゴル、シボ、トゥバなどの人たちから聞き書きをおこなっている。七月十二日にウルムチで、後発の濱田正美（当時神戸大学文学部助教授）、堀直（当時甲南大学文学部教授）、林俊雄（当時創価大学文学部助教授）、庄司博史（当時国立民族学博物館助教授）と合流した。合流後、ウルムチからボルタラ、温泉、精河などまで行動をともにしたあと、先発の松原・楊は七月二十五日に帰国する。先発組は、ジュンガル盆地の外縁を反時計まわりにほぼ一周したことになる。自動車の走行距離は、七〇〇〇キロメートルちかくだった。後発組のなかで、最後まで新疆にのこった濱田は九月十九日に帰国した。

国境をこえる

一九九二年度の第二次調査の先発組をつとめた松原・楊は、六月二十日から九月三日まで新疆とカザフスタンで調査・研究をおこなった。松原・楊は、ウルムチからカラマイ経由でアルタイに直行したあと、前年度におとずれたアルタイ山中の夏営地トゥルガイトにむかう。トゥルガイトを中心に約一カ月滞在し、騎馬でジャガスタイなど数箇所の夏営地をたずねあるいた。このフィールドワークのなかで、アルタイ山中における遊牧の現状と歴史についておおくのことをまなんでいる。とくに印象的だったのは、夏営地においてヒツジやウシ、ウマ、ラクダなどの群れのおおくが牧夫の随伴しない放し飼いの状態で自由に生活していたことである。この状態でも、ヒツジやウシの群れはテントちかくの寝場所を朝にでて日中の採食をすませて夕方にかえってきていた。これは、遊牧の起源が現生人類と野生動物群との共生関係の構築を基盤にしていたことをよく反映した事象といえる。

一九九二年八月一日に、イリで後発の堀・林と合流した。翌日、国境のホルゴスをこえてカザフスタンに入国する。このあと、約三週間をかけてカザフスタン東部の石人や古墳、遺跡などを踏査した（**写真4**）。その経路は、ホルゴス―アルマアタ―タルディ・クルガン―アヤグズ―タルバガタイ―ザイサン―ハトゥン・カラガイ―ウスチカメノゴルスク―アヤグズ―タルディ・クルガン―ジャルケント―ホルゴスであった。

独立まもないカザフスタンでは、食糧や生活物資が極度に不足していた。新疆側からカザフスタン側にホルゴスの税関を

SAMPLE

写真4（上）　カザフスタン東部にて。左から松原、林俊雄、現地の女性記者、中国新疆ウイグル自治区社会科学院考古学者・張玉忠、堀直（1992年夏、楊海英撮影）

写真5（下）　独立して間もないカザフスタンのバザールの風景（1992年夏、楊海英撮影）

ぬけてくるトラックの荷台やバスの天井には、例外なく車がかたむくほどの荷物が満載されていた。こうしたトラックや満員バスが、数十台の車列をなしてはしりさってゆく。イリのホテルでは、夜明けまでドンゴロスの袋に衣類などを極限までつめこんで糸で縫いあわせる喧噪がやむことはなかった。カザフスタンから買いつけにきた人たちを中心にした経済活動にむけた熱気は、きわめてたかいものであった（**写真5**）。

八月二十一日に、ホルゴスで濱田のでむかえをうける。ホルゴスからイリをへて、昭蘇にむかった。昭蘇では、六世紀末にたてられたとされる西突厥のニリ可汗の事績を顕彰した文章の刻まれた石人をたずねる。石人の腰から下の部分に刻まれた文章は、ソグド文字でかかれている。昭蘇からシャタにむかう途中のアクスの川岸で、横たおしになった高さ二・五メートルの三角錐状の石柱をみつけた（**写真6**）。この石柱には、アラビア文字の銘文が刻まれていた。濱田の解読によると、カラハン朝（十～十二世紀）時代の碑文の可能性があるという。[2] シャタから新源などをへて、天山山脈中のナラト草原の夏営地にゆく。夏営地で短時間滞在したあと、イリを経由して八月三十一日にウルムチにかえった。松原・楊は九月三日、堀・林・濱田は九月十六日に帰国する。

一九九三年度の第三次調査は、新疆とモンゴルにおいておこなった。先発組の松原・楊は一九九三年六月二十日から九月十八日まで、後発組の濱田・堀・林は七月二十九日から九月十八日、小長谷有紀（当時国立民族学博物館助教授）は七月二十九日から八月十二日まで、それぞれ調査に参加している。

松原・楊は、ウルムチからカラマイ経由でアルタイに直行したあと、前年と同様にトゥルガイトへむかう。この年の六月十日ころに大雨がふり、洪水のためトゥルガイトへの道はあちこちで寸断されていた。そのため、自動車は途中までしか利用できず、ウマを調達して一日がかりでトゥルガイトにつく。トゥルガイトまでの騎馬の道中は、夏営地へ移動するヒツジやウシ、ウマの大群と家財道具を積載したラクダの隊列とずっと一緒に行をともにしている。トゥルガイトを中心にジャガスタイなどの夏営地をたずね、三週間ほど前年度から継続している聞きとり調査をおこなった。

七月十六日にトゥルガイトからアルタイにでて、翌日にアルタイからキョクトガイまで移動した。二年前に工事中だったアルタイ・キョクトガイ間の道路が、完全に舗装されている。キョクトガイとその東のチンギル（青河）で、いくつかの夏営地をたずねる。アルタイ山脈中のキョクトガイやチンギル近郊の夏営地は、急峻な山岳地帯にあってトゥルガイトなどに

SAMPLE

写真6　シャタで発見したアラビア文字の石碑。近くに立つのは濱田正美（1992年夏、楊海英撮影）

くらべると狭隘な草原となっている。交通手段は、すべて騎馬である。チンギルから北東一〇〇キロメートルくらいのところにある三道海子で、直径約四〇メートル、高さ約二〇メートルの巨大な積石塚をみた。地元ではゲゲン・オボとよばれ、チンギスハンの次男チャガタイの墓とも、チャガタイの息子の墓ともいわれる伝承がのこされている。七月二十九日に、チンギルからウルムチにかえった。

七月三十日に、ウルムチで後発組と合流した。八月一日に、小長谷がホボクシルにむけて出発する。松原・楊・濱田・堀・林は、八月三日に天山山脈中のユルドゥズ草原（モンゴル語名バインブラク草原）を目ざしてウルムチをたった。カラシャフル（焉耆）を経由して、ユルドゥズ草原の中央部にはいる。ユルドゥズ草原では、中国科学院新疆生物土壌沙漠研究所巴音布魯克草原生態観測試験站に滞在して、ここを拠点にして東西南北に足をのばす。[3] 一九七二年に設置された観測試験所は、高度二四七三メートルのところにある。ここでは、草原在来の草の草丈はひくいので、種をまき一年に二〜三回灌漑をして草丈のたかい牧草を育成する実験もおこなっている。冬季の家畜用の飼料である干し草を確保するため、刈りいれのできる草丈のたかい牧草の育成を目的にしているからである。

ユルドゥズ草原は、広闊な空間である。この空間に、

SAMPLE

代々の遊牧民たちがすごした痕跡を物語る石人や大小の古墳が点在している。五六八年に突厥のイステミ可汗がはるか西方のビザンツ帝国からの使者ゼマルコスをむかえたのは、ユルドゥズ草原の牙帳であったとされる。イステミ可汗は、絹地の織物で内部を飾った天幕のなかで、二輪の車つきの金の椅子にすわって使者をむかえている。使者には、金の壺と金杯でクミズ（馬乳酒）がふるまわれた。このような栄華をつたえるものはなにものこされていないが、モンゴル高原のオルホン川流域とならんでユルドゥズ草原が豊かな草原であったことは確かといえるだろう。

八月十三日には、十日間たらずすごしたユルドゥズ草原をあとにウルムチに帰着した。陸路で国境をこえて、モンゴルにはいる準備をするためである。予定では、新疆側のハミからモンゴル側のゴビアルタイ県（アイマク）にぬけることになっている。呂銘さんたちの尽力で、新疆側の出国の手つづきもモンゴル側のうけいれの手つづきも完了していた。八月十六日にウルムチをたって、バリコルなどを経由して八月二十日にハミに到着した。翌日、ハミの税関で出国とモンゴル入国の交渉をはじめると、国境が閉鎖されているという。国境閉鎖の理由は、六月上旬の大雨でゴビアルタイの道路が寸断されていることとペストの大流行で入境・出境の禁止令がでているためとの説明であった。税関との押し問答では埒があかないので、陸路でのモンゴルゆきの当初計画を変更することにする。

八月二十三日にハミをはなれて、ウルムチへむかう。空路で、モンゴルに入国するためである。八月二十九日に、飛行機でウルムチから北京にむかう。八月三十一日に、北京を出発してウランバートルに到着した。

到着したウランバートルの飛行場では、飛行機のタラップの下から待合室まで赤い敷物をしきつめた通路が用意されていた。北京からの飛行機にインドから仏舎利をはこんできた国賓四人が同乗していて、この人たちを歓迎するためにもうけられたものである。仏舎利を収納した壺は、使者のひとりの頭上にのせてはこばれた（**写真7**）。この仏舎利は、中央美術館における世界の仏像の展覧会に展示されている。一九九二年二月に社会主義を放棄してモンゴル国となって以来、仏教の再興が社会的に熱い潮流となっていた。この展覧会は、仏教再興の熱い潮流に呼応するものである。

モンゴルでの調査活動は、ルハグワスレン（当時国立歴史民族博物館館長）の支援をうけて実施することができた。九月一日には、ウランバートル南東のナライハ近くにあるトンユクック碑文をたずねる。トンユクック（六四六〜七二六）は、突厥のイリティリシュ可汗の重臣として活躍するとともに、その息子たちのビルゲ可汗やキョル・テギンの治世をささえた。ト

SAMPLE

写真7　社会主義制度が崩壊した直後、宗教信仰の自由を迎えるかのように、仏舎利を丁重に受け入れるモンゴル国（1993年8月、楊海英撮影）

ンユクックの功績をしるした碑文は、かれの死後まもなく建てられたとされる。わたし自身が梅棹忠夫（当時国立民族学博物館館長）、加藤九祚（当時国立民族学博物館教授）たちとともに一九八二年六月にはじめてモンゴル人民共和国をたずねたときに、トンユクック碑文への訪問の希望をだしていたが実現しなかった。それも当然で、当時この碑文の位置する一帯にはソ連軍の大規模な軍事基地があったのである。トンユクック碑文を実見する希望は、十一年の時をへてかなえられたわけである。

九月二日には、二台の車に分乗してウランバートルを出発した。これは、ホショ・ツァイダムのオルホン突厥碑文とハラホリンのカラコルム遺跡を目ざしての旅である。当時は、ウランバートルとハラホリンとのあいだの三百数十キロメートルの道路には未舗装や未修理の部分がおおかった。二台の車は、草原のうえに刻まれた多数の轍跡をそれぞれ自由にたどりながらすすんでゆく。そのうち、途中からお互いの車を確認することができなくなった。一号車には松原・楊・ナワン（モンゴル科学アカデミー、考古学者）、二号車には濱田・堀・林が分乗している。最終的には、一号車はホショ・ツァイダムに、二号車はハラホリンに夜分おそく到着した。相互の連絡手段がないうえに、ガソリンが逼迫している。当時のモンゴルの経済状況はわるく、ガ

SAMPLE

ソリンの補給も自由にはできない。

ホショ・ツァイダムでは、キョル・テギン碑文のちかくにテントをはって二号車の到着をまつことにした。その夜、二号車はこなかった。翌日も、二号車はこない。夜になると、ときどき草原のはるかむこうから自動車のライトの光がみえる。草原に起伏があるため、ライトの光は視界からきえたりあらわれたりをくりかえしながら近づいてくる。二号車かと期待するが、そのたびに走りさって遠ざかってゆく。結局、その夜も二号車はこなかった。九月四日朝、手もちの最後のガソリンをつかって五〇キロメートルほどの距離にあるハラホリンにナワンを乗せた一号車を派遣する。そこで、二号車の消息をたずねるのと捜索のためのガソリンを確保するためである。さいわい、ハラホリンでまっていた二号車と再会することができた。運転手のあいだで到着地についてのおもいちがいがあったため、このようなゆきちがいが生じたのである。

十一年ぶりに再見したキョル・テギン碑文は、劣化が進行していた。七三二年に建てられた碑文は、寒暖の差がおおきい気候のなかで石脈の内部にしみこんだ水分の凍結と融解のくりかえしによって劣化せざるをえない。のちの一九九八年になって、国立民族学博物館の事業のひとつとしてキョル・テギン碑文の精巧なレプリカを二体つくった。ひとつはモンゴル国立歴史民族博物館に寄贈し、ひとつは国立民族学博物館の大モンゴル展（一九九八年）で展示した。

九月五日にカラコルムの都市址をあるきまわったあと、ハラホリンをあとにしてウランバートルにかえる。翌日、飛行機でウランバートルからウブス県の県都ウランゴムにむかう。ウランゴムの県立博物館で、プルジェワリスキー馬（モンゴル語名タヒ）の標本に対面した。一九八六年に捕獲された個体の標本で、モンゴルで生息が確認された最後の事例である。プルジェワリスキー馬はながらく野生馬とされてきたが、最近になって七五〇〇年前ころにカザフスタンで家畜化されていたウマが野生化したものの子孫といわれている。

ウランゴムの近郊で、ホトンの人たちの集落をたずねた。ホトンの人口は、五〇〇〇人くらいである（**写真8**）。十八世紀前半ころ、中央アジアの諸地域から農耕に従事するためにこの地域におくりこまれた人たちの子孫とされている。ホトンはモンゴル語で「町の人」を意味し、もともと他称であったのが自称に転化したものである。本来はトルコ語系の言語を話していたが、ドルベト方言の影響を強くうけている。唯一神であるアマル・ホマルを信仰し、みずからをムスリマン（イスラーム教徒）とよぶ。イスラーム教でおこなわれる断食や犠牲祭などは、ホトンのなかでは実行されていない。社会主義体

SAMPLE

写真8　モンゴル国西部に暮らすトルコ系のホトン人（1993年9月、楊海英撮影）

制が放棄されたあと、モンゴルの人たちのなかで仏教の再興の潮流がおおきくなっているのに並行して、ホトンの人たちのなかではイスラーム教再興の熱がたかまっていた。

ウブス県の西南部をまわったあと、九月十四日の飛行機でウランゴムからウランバートルにかえる。九月十七日にウランバートルをたって北京で一泊し、翌日に帰国した。

モンゴルにおける民族形成の歴史民族学的研究

アルタイ・天山を中心とした地域を対象として三次にわたっておこなった歴史民族学的研究は、さらに継続して対象を拡大する必要があった。研究調査を拡大すべき対象となる地域は、北方と西方である。そのなかでまず北方の地域におけるフィールドワークを目的として、一九九四年に文部科学省の科学研究費補助金の交付申請をおこなった。この申請書のタイトルは、「モンゴルにおける民族形成の歴史民族学的研究」（研究課題番号：07041307）である。一九九五年春に、三年にわたるこの計画の採択が正式に決定した。[4]

一九九五年度の第四次（一九九一年度からの通算）調査は、おもにモンゴル国中部と西部でおこなった。調査の期間は、一九九五年八月二日から八月三十一日である。参加者は、松原・楊・濱田・堀・林・小長谷・萩原守（当時神戸商船大学助教授）であった。

SAMPLE

八月四日に、飛行機でウランバートルからムレン経由でウランゴムにむかう。今回の調査には、ルハグワスレンが同行している。ウランゴムで、先行していた林・ナワンと合流する。一九九三年度につづいてウランゴムを再訪したのは、当初の計画でウランゴム北部の国境から陸路でロシア連邦トゥバ共和国に入国する予定をしていたからである。モンゴル出国とトゥバ共和国入国にともなう手続きや許可の取得は、ルハグワスレンがすべてすませてくれていた。

八月五日には、ホトンの人たちの集落を再訪した。ホトンの人たちの話から、社会主義時代における宗教や言語への弾圧による傷痕の深さがうかがわれる。一九三九年のモンゴルと満州国との国境をめぐるハルハ川戦争（ノモンハン事件）には、四十人のホトンの人たちが召集され、十人しか帰還できなかったという。ノモンハン事件とよばれる日本軍とソ連軍・モンゴル軍との戦いが、戦場となったモンゴルに住むさまざまな人びとの人生に深刻な影響をもたらしていたわけである。

八月七日朝、ウランゴムから国境のボルショまで北上する。モンゴル側の税関で、なんの問題もなく出国スタンプをパスポートにおしてもらう。すこしはなれたところにあるロシア側の税関で入国スタンプをもらおうとすると、税関のなかで電話をかけて協議をはじめた。しばらくまっていると、トゥバには入国できないという通告である。理由は、二週間前にだされたロシア連邦首相チェルノムイルジン名の命令によって、地方の税関での出入りはロシア国籍かモンゴル国籍をもつものに限定されたためという。そこから入国するには、首相の特別許可が必要とのことであった。ロシア側税関の事務所の電話をかりて、ルハグワスレンがわたしたちのうけいれ先のトゥバ共和国科学アカデミー歴史言語文学研究所所長のドルジに電話で説明した。ドルジ所長は、翌日トゥバ共和国の首都キジルから国境までゆくからまつようにという。その日の夜は、国境線のちかくで野営した。

九月八日の午後、ドルジがキジルから五時間ちかくかけて車できた。ドルジが税関側とかけあってくれるが、ロシア連邦首相名の命令をやぶることはできない。モンゴルとトゥバの国境線をしめす遮断バーごしに、ドルジが持参したスイカとわたしがもっていたモンゴルウォトカを交換し握手してわかれた。陸路での国境ごえには、さまざまな困難がともなうものである。

九月九日から、トゥバゆきのかわりにモンゴル西部を踏査する旅をはじめた。まず、モンゴル国のもっとも西に位置するバヤンウルギー県を目ざす。九日の午後、ガソリンの補給のためツァガンノールの町にたちよる。ツァガンノールは、ほと

SAMPLE

んど廃墟の状態であった。社会主義体制の時代には、この町はソ連邦からモンゴルにおくられてくる援助物資の分配センターの機能を担っている。ソ連邦の解体後、その機能を喪失したのとそこではたらいていたカザフ人のおおくが独立カザフスタンに移住したため廃墟と化したわけである。おおくの廃屋の木材や板が、はぎとられている。県都ウルギーまでの道々で、はぎとられた状態の廃屋や大量の電線が切断された状況などを目にしている。この当時、モンゴル国でさかんにさけばれた「民主化する」という言葉を「なにもなくなる」という意味につかうことが流行しているとのことであった。

バヤンウルギー県では、カザフ人が多数派をしめる。これらのカザフ人には、一九三〇年代のスターリンによる遊牧絶滅政策にともなう虐殺や飢饉から逃れたり、同時代に進行した新疆での動乱を避けてここにきた歴史を背負う人が多数ふくまれている。バヤンウルギーやそれに隣接するホブドなどの地域には、カザフだけでなく、トゥバやアルタイ・ウリヤンハイ、ザハチンなど多様な民族集団がみられる。いずれの民族集団も、複雑で多様な歴史の流れのなかを現在まで生きついできたのである。

バヤンウルギーからホブド、ゴビアルタイ、ザブハン、アルハンガイ、ボルガンの諸県をめぐって、九月二十七日夜おそくにウランバートルに帰着した。同月三十一日、北京経由で帰国する。

広域踏査はつづく

一九九六年度の第五次調査は、一九九六年八月七日から三十一日までトゥバ共和国とモンゴル国北西部でおこなった。参加者は、松原・楊・堀・林・小長谷・萩原とモンゴル国側のルハグワスレン、ナワンである。今回は、昨年度にモンゴル側からトゥバ共和国に陸路ではいれなかったので、空路でトゥバ共和国にはいったあと陸路でモンゴルに入国することにした。出入国に必要な手続きは、すべてルハグワスレンがおこなってくれた。

八月七日、新潟を経由してイルクーツクに到着した。八月十日午後、飛行機でイルクーツクからトゥバ共和国の首都キジルに飛ぶ。キジルの飛行場には、ルハグワスレンとナワンとともに、昨年国境でわかれたドルジもむかえにきていた。わたしたちが利用する三台のソ連製ジープと三人の運転手も、国境をこえてきている。ウランバートルからキジルまで、陸路をつかっている。

SAMPLE

トゥバ共和国は、面積一七万平方キロメートル（日本の面積の約半分）、人口約三十万人である。言語はトルコ語系のトゥバ語、モンゴル国と同様に仏教徒が多数をしめる。ここでも、仏教再興の潮流が強くみられる。ソ連邦の解体時には独立を目ざすうごきもあったが、ロシア連邦にとどまる選択をしている。ロシア革命とともにおこった政治的な嵐のなかで独立国（トゥバ人民共和国）であった時期もみられるが、一九四四年に自治州としてソ連邦に編入された歴史がある。

トゥバ共和国には、遊牧民の歴史をしめす遺跡が多数存在している。その代表的な遺跡のひとつが、アルジャン古墳群である。ここを、八月十一日にたずねた。アルジャン古墳群は、キジルの北西約八〇キロメートルのところに位置する。広濶な谷間に八列をなす数百基の古墳が、十数キロメートルにわたってならんでいる。一九七四年に発掘された大古墳は、直径八〇メートルの円形で、内部はカラマツの木材を井桁に組んだ七十の槨室からなっていた。中央の王墓のまわりには、十数人の殉死者の棺と百数十頭のウマが陪葬されていた。副葬品のなかには、スキタイ動物文様の青銅製品の飾板などがあった。時代は、紀元前九世紀末から紀元前八世紀初頭のものと比定されている。現在のところ、スキタイの遺跡としては最古のものとかんがえられる。

八月十二日、キジルの南東約二〇〇キロメートルのテス湖のなかの島にあるポルバジン遺跡をおとずれた。キジルから十九人乗りの小型プロペラ機をチャーターしてテス湖ちかくのクングルトゥクの草原の飛行場にむかい、トラックと小舟をのりついで現場に到着した（**写真9**）。ポルバジン遺跡は、八世紀末のウイグル時代の都城址である（**写真10**）。周囲は、二一五×一六二メートルの方形をした版築の城壁にかこまれている。永久凍土層の湖中の島にこのような都城を、なぜウイグルが建設したのか不明である。

トゥバ共和国のなかを、三台のジープで縦横に駆けめぐった。途中で小エニセイ川を、車ごと渡し船でわたっている。この渡し船は、両岸の櫓のあいだに空中にわたした頑丈なワイヤーにつながれ、水流の強い圧力を舵にうけることによって左右どちらにでもエンジンなしに動けるすぐれものであった。渡し賃は無料で、船頭はこの三年間無給ではたらいているという。ソ連邦解体にともなう影響が、このようなところまでおよんでいるわけである。

八月十六日、トゥバ共和国の西端に近い町アクドブラクまでゆく。アクドブラクには、石綿（アスベスト）の大工場と鉱山がある。ソ連時代は、アクドブラクの工場でソ連邦全体に必要な石綿のほとんどを生産していたという。ここでも、工場

SAMPLE

写真9　トゥバの遺跡調査時に乗った小舟（1996年8月、楊海英撮影）

労働者は無給で細々と操業を継続しているとのことであった。

八月十七日、トゥバ共和国からの出国のため国境の税関ポストにむかう。途中で税関ポストへむかう道がわからなくなり、ちょうど通りかかった騎馬のモンゴル人の老人に道順をおしえてもらった。昨年通過できなかった税関ポストをぬけて、ほとんどトラブルなくモンゴル側に入国することができた。この日の夕方、国境ちかくの草原で野営する。

八月十八日、ウランゴムにたちよったあと、東へむけて車での移動を開始する。オブス県の東部では、春夏秋冬の家畜群の移動にともなって、役所もそれぞれの営地に移動する方式がはじまったとのことである。この方式は、ホブド県でも採用されているという。オブス県をぬけたあと、ザブハン県、フブスグル県などを踏査して、八月二十七日の夜半にウランバートルに帰着した。八月三十日にウランバートルをたち、北京で一泊したあと翌日帰国した。

一九九七年度の第六次調査は、一九九七年八月六日から八月三十日まで、ロシア連邦ブリヤート共和国とモンゴル国東部においておこなった。参加者は、松原・楊・堀・林・小長谷・萩原とルハグワスレン、ブリヤート科学アカデミーのバヤル（考古学者）である。

八月六日夜、新潟からの飛行機でイルクーツクにつく。飛行場には、ルハグワスレンとバヤル、先発していた楊がむか

SAMPLE

写真10　トゥバ共和国ポルバジンのウイグル時代の都城址（1996年8月、楊海英撮影）

えにきていた。ウランバートルから陸路できたジープ三台と三人の運転手も、一緒である。

八月七日午後、イルクーツクから北東約五〇キロメートルのウスチオルデンスキー近郊にあるマナハイ遺跡をたずねた。マナハイ遺跡は、唐時代のトルコ系クリカンの人びとの城塞跡とされるが、地元のブリヤートの人びとは神聖な祭祀遺跡としている。わたしたちを現場に案内してくれた文化センター所長のユーリーボリソビッチほか三人のかたがたは、聖なる祭祀場にはいるときのシャーマニズムの儀式を再現してくれた。ブリヤート古来の文化ははげしいロシア化の影響をうけて変容しているため、社会主義体制の崩壊とともに固有の儀礼や信仰の復興の模索がはじまっているわけである（**写真11**）。

八月八日、イルクーツクからブリヤート共和国の首都ウランウデにむかう。八月十日には、ウランウデからバイカル湖の東側にそってバルグジン盆地を目ざして北上する。ウランウデからバルグジン盆地中央部のクルムカンまでは、約四〇〇キロメートルの距離であった。バルグジン盆地にブリヤート人が進出したのは、十八世紀ころとされる。その北部には、エベンキ人が居住していた。バルグジン盆地の内部は、広大な湿地帯がしめている。そのような場所のところどころに、新石器時代以降のさまざまな遺跡が点在する。

SAMPLE

写真11　ブリヤート共和国のウスチオルデンスキー草原において、シャーマニズムの儀式を終えてから現地の研究者たちと交流した風景。左からルハグワスレン、萩原守、松原、小長谷有紀、堀直、林俊雄とブリヤート・モンゴルの研究者たち（1997年8月、楊海英撮影）

八月十二日に、ウランウデでブリヤート歴史博物館の収蔵庫内の資料をみせてもらう。この収蔵庫の建物はロシア正教の教会であったが、ソ連時代にチベット仏教関係の仏像や仏具を大量に収蔵して封印していたものである。収蔵品をくわしくみる時間はなかったが、注目すべき資料がいくつかあった。そのひとつは小型の金銅製の弥勒菩薩像で、後背に「太平真君二季歳」の銘があった。これは、四四一年の北魏の太武帝の時代のものである。北魏は、鮮卑拓跋部によって建てられた強力な遊牧国家だ。この仏像は、ウランウデ近郊の畑から出土したという説明をうけた。収蔵庫内に保管されている大量の仏教関係の資料の大部分は、社会主義時代のモンゴルの寺院などから強制的に接収されたものとおもわれる。

八月十二日夜、ウランウデからモンゴル国境にちかいキャフタへ南下する途中で発掘中のバヤンウンドゥル遺跡をたずねる。発掘は、ダニエル隊長と二人の研究者を含む二十人ほどのメンバーでおこなっている。一九八九年に試掘したあと、一九九一年から発掘をはじめた。遺跡は、匈奴時代の城塞と低い土塁にかこまれた住居址からなっている。これまで、ナイフや白銅の漢鏡、陶片、ヒツジとウシの骨などが出土している。

SAMPLE

この夜、遺跡のそばで野営した。

八月十三日の昼に遺跡をたって、キャフタにむかった。翌日の午後、ブリヤート共和国側のナウシキ駅から汽車にのってモンゴル国側のスフバートル駅につく。ロシア国籍やモンゴル国籍をもたない外国人は、車で国境をぬけることができず、鉄路でこの間を移動しなければならない。スフバートル駅で、わたしたちのジープと再会した。

八月十五日朝、スフバートルのちかくのセレンゲ川とオルホン川の合流点をみにゆく。滔々とした豊かな流れは、まさに大河のおもむきである。スフバートルから南下してダルハンをすぎたあと、南西方向にすすんでアマルバヤスガラント寺院にむかう。この寺院は、一七二六（雍正四）年に清朝によって建てられたが、一九三八年に閉鎖されソ連軍が仏像や仏具を何台ものトラックではこびさったという。ウランウデの収蔵庫の資料の一部は、このとき収奪されたものであったとおもわれる。寺院には、二十人ほどのラマ僧がいた。

八月十六日朝、ダルハンにひきかえしたあとウランバートルをへてモンゴル東部へむかう。ヘンティー県、ドルノド県、スフバートル県などを踏査する。南は、中国国境にちかいダリガンガまでゆく。八月二十六日に、ウランバートルに帰着した。八月三十日、帰国する。

中央アジアの魅力

中央アジアの魅力は、底しれないほど深いものである。まず、風景が魅力的だ。はてしなくつづく草原や深く刻まれた山襞のなかの道をたどるとき、そこを往来した人びとの姿が走馬灯のようにうかびあがってくる。その人びとが醸しだす魅力、折りかさなって重層化した歴史の魅力にふれるためには、現地にみずからの身をはこぶしかない。その魅力の源をすこしでも理解するには、その土地に身をおき、その土地の風を身体のなかにいれる努力が不可欠だ。これが、フィールドワークの第一歩となる。

「百聞は一見に如かず」という言葉がある。自分の目で一見することの方が、耳から百聞するよりも勝っているという意味だ。その通りであろう。実際には、百聞も必要であるとともに、百見や百読も必要といえるだろう。できるだけおおくの土地の人の話をくりかえし聞き、できるだけ広くおおくの土地の事物を見、できるだけ広く深く資料や書物を渉猟すること

SAMPLE

がのぞましいわけである。最後にもっとも不可欠なのは、みずからの頭をつかって思索を深めることだ。これが、フィールドワークの第二歩、第三歩となる。

フィールドワークを第一歩から第二歩、第三歩まで着実に積みあげるのは、現実には至難の業といえる。これは、永続的なひとつの努力目標といってよいかもしれない。できるだけ、この努力目標にむかって歩をすすめる必要のあることは確実といえるだろう。なによりも、フィールドワークはそのフィールドに足をむけなければ開始できないものである。中央アジアをひとつの場とした、わたしたちのフィールドワークへのとりくみはこうしてはじまった。

六次にわたる広域踏査の総走行距離は、一回あたりの走行距離が五〇〇〇～八〇〇〇キロメートルであったので、四万キロメートル前後になった。ちょうど、地球を一周する距離になる。これだけの距離をはしったにしても、もちろん実見できたのはすべての範囲ではない。それは、限定された範囲である。そういう制約はあるけれど、広域踏査のもたらす意味にはおおきなものがあるといえるだろう。広域踏査によって、風景がわたしたちの身体のなかに定着してゆくからである。それにともなって、風景のなかにとけこんでいる遺跡や重層化した歴史の澱を立体化してみることができる可能性がでてくる。

わたしたちの六次にわたる広域踏査は、これですべて完結したわけではない。この六次の広域踏査の延長線上に、西方へのさらなる調査の継続と対象地域の範囲の拡大や、いくつかの地点をえらんでの長期的で深いインテンシブな調査をおこなう計画の必要性を痛感していたからである。残念ながら、諸般の事情で継続の計画をすべて実現することはできていない。それでも、継続計画の一部は、小長谷有紀を代表とする「モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究」（一九九八年度、一九九九年度、二〇〇〇年度の三次。文部科学省科学研究費補助金　研究課題／領域番号10041057）などにおいて実施している。[5] この主に内モンゴル地域を対象としたフィールドワークには、小長谷・松原・楊・萩原・ルハグワスレンなどが参加した。一九九八年以降に、林俊雄はモンゴルでの考古学的発掘、楊海英は内モンゴル・青海省・新疆などでの数おおくのフィールドワークをおこなっている。

中央アジアの魅力とそこに蓄積された叡智をさまざまな角度から掘りおこして正当な形に位置づけてゆくためには、さらに数おおくのフィールドワークをつみかさねてゆかなければならない。これは、もちろん一九九一年度から一九九七年度にかけてのフィールドワークに参加したメンバーだけに限定された課題ではない。すでに多数のすぐれた研究者たちがとりく

SAMPLE

写真12　モンゴル高原東部の遊牧民の家畜の群れ。ヒツジとヤギからなる（1997年8月、楊海英撮影）

んでいる課題であるし、これからもよりおおくの研究者が参加してくることが期待される領域だとおもっている。それによって、現生人類の豊かな営みをあらためて確認することができるであろう。

わたし自身は、これまで四十数年にわたってユーラシアにおける遊牧社会を主要な研究対象としてきた。その研究のなかで到達したのは、現生人類史における遊牧の起源と展開にはたした中央アジアと西アジアの重要性の再認識である。ひとつの結論は、遊牧の起源がかならずしも家畜化と直結するものではないということである。それは、家畜化を前提にしなければ遊牧の起源はないというのではなく、遊牧の端緒は現生人類と野生の動物群との共生関係の構築にあったとかんがえるものだ。現生人類と最初に共生関係を構築したのは、野生状態のヤギの群れとヒツジの群れであったであろう（**写真12**）。家畜化は、それよりずっと後の時代におこっている。もうひとつの結論は、現生人類と野生動物群との共生関係の構築において主要な役割をはたしたのが、女性と子どもたちであったということである。そうした結論に到達した根拠のひとつは、長年のフィールドワークにもとづく知見だ。これまで参与してきたユーラシアの遊牧社会のなかで、家畜群の正確な来歴と母系制をたどる家畜群の個体名をすべて把握しているのは例外なく女性たち（それと子どもたち）である。こ

SAMPLE

うした現象は、中央アジアと西アジアにおいてはやくから展開したものであろう。

本書『中央アジアの歴史と現在――草原の叡智』の執筆者は、いずれも「天山・アルタイ地域における遊牧の歴史民族学的研究」と「モンゴルにおける民族形成の歴史民族学的研究」のプロジェクトに参加したメンバーである。松原・楊・小長谷は民族学（人類学）の立場から、堀・濱田・萩原は歴史学の立場から、林は考古学の立場から、それぞれ論文を執筆している。これらの論文は、すべて各執筆者のフィールドワークのなかから生まれたものである。本書のとりまとめは、楊海英君がおこなってくれた。

「アジア遊学」の一冊として本書の出版をひきうけていただいた勉誠出版と本書の編集にあたっていただいた福井幸さん、和泉浩二郎さんに、深い謝意を表しておきたい。

注

（1）トルコ系遊牧民ユルックに関するフィールドワークの記録の一部は、次の書物にまとめている。松原正毅『遊牧の世界――トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』上・下（中公新書、中央公論社、一九八二年）。本書の再刊は、平凡社ライブラリー、平凡社、二〇〇四年。

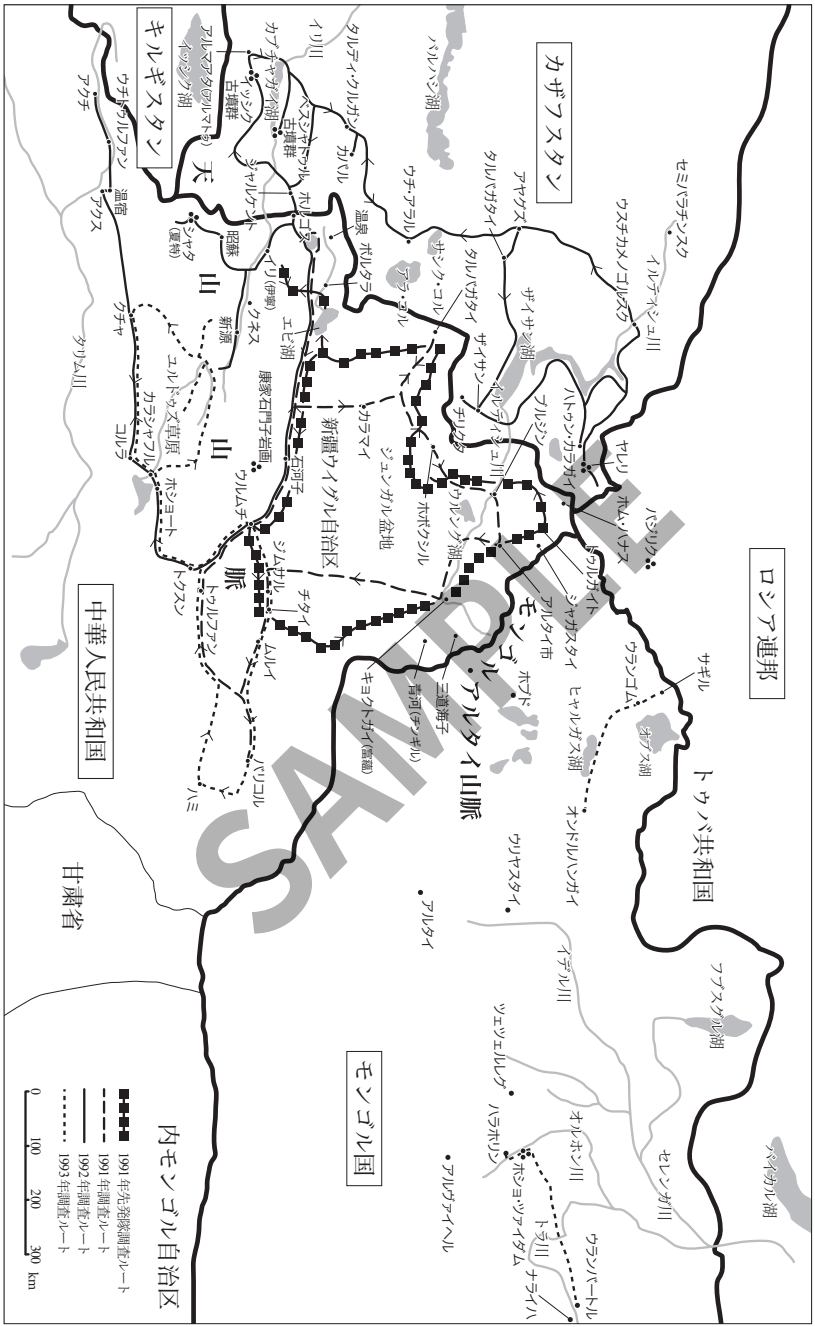
（2）Masami Hamada, 'L' inscription de Xiate (Shata)', *SILK ROAD STUDIES* V, pp.63-65, 2000.

（3）中国科学院新疆生物土壌沙漠研究所巴音布魯克草原生態観測試験站の紹介とユルドゥズ草原（バインブラック草原）における遊牧の現状について、つぎの梅村論文に詳述されている。梅村は、一九九三年九月初旬にユルドゥズ草原をたずねた。梅村坦「天山山中に遊牧民をたずねて」（松原正毅・小長谷有紀・楊海英編『ユーラシア草原からのメッセージ――遊牧研究の最前線』平凡社、二〇〇五年）。

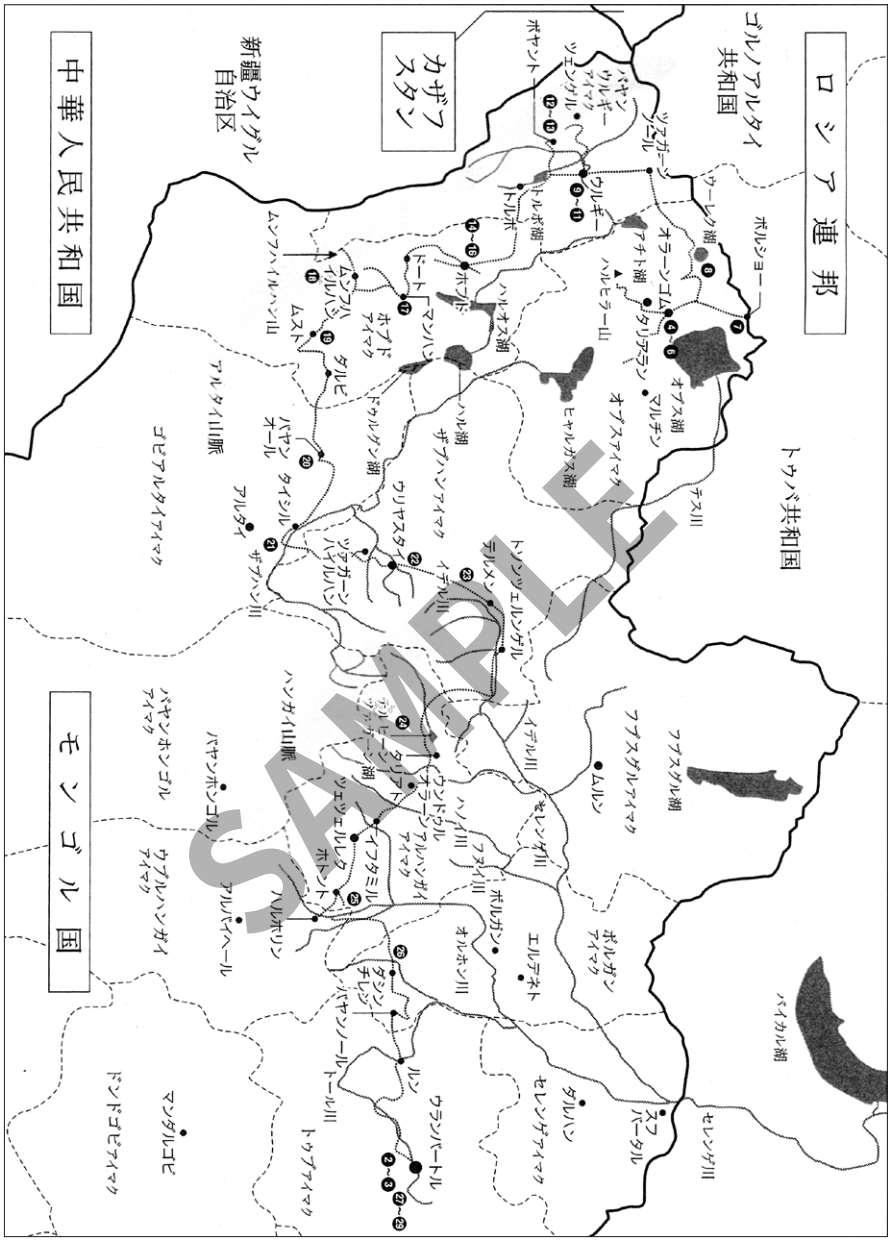
（4）一九九五年度、一九九六年度、一九九七年度のフィールドワークについては、つぎの書物に詳述されている。萩原守『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、二〇〇九年）。小長谷有紀『人類学者は草原に育つ――変貌するモンゴルとともに』（臨川書店、二〇一四年）。

（5）小長谷有紀編『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究』（科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書、二〇〇一年）。

SAMPLE

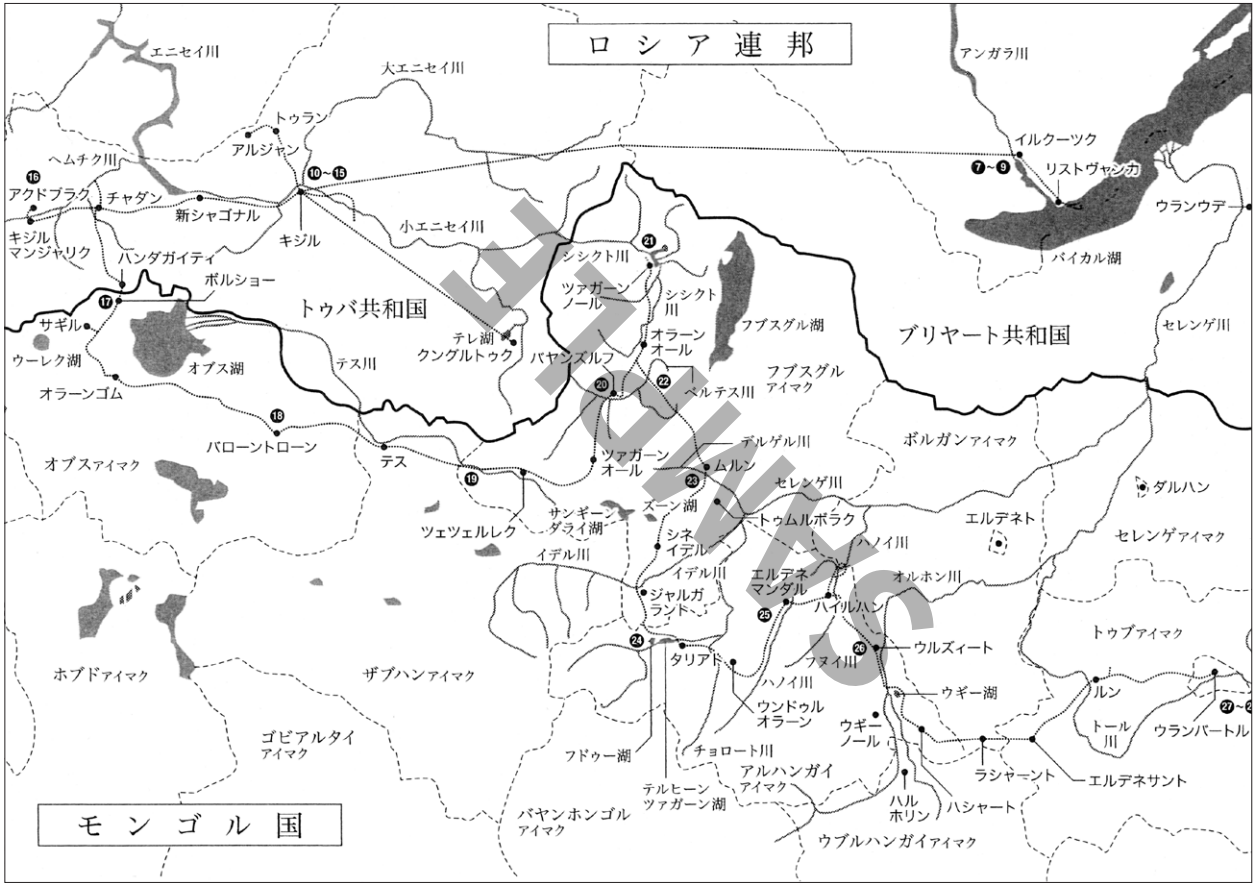


地図1　1991～1993年における調査ルート（林俊雄原図を一部改編）

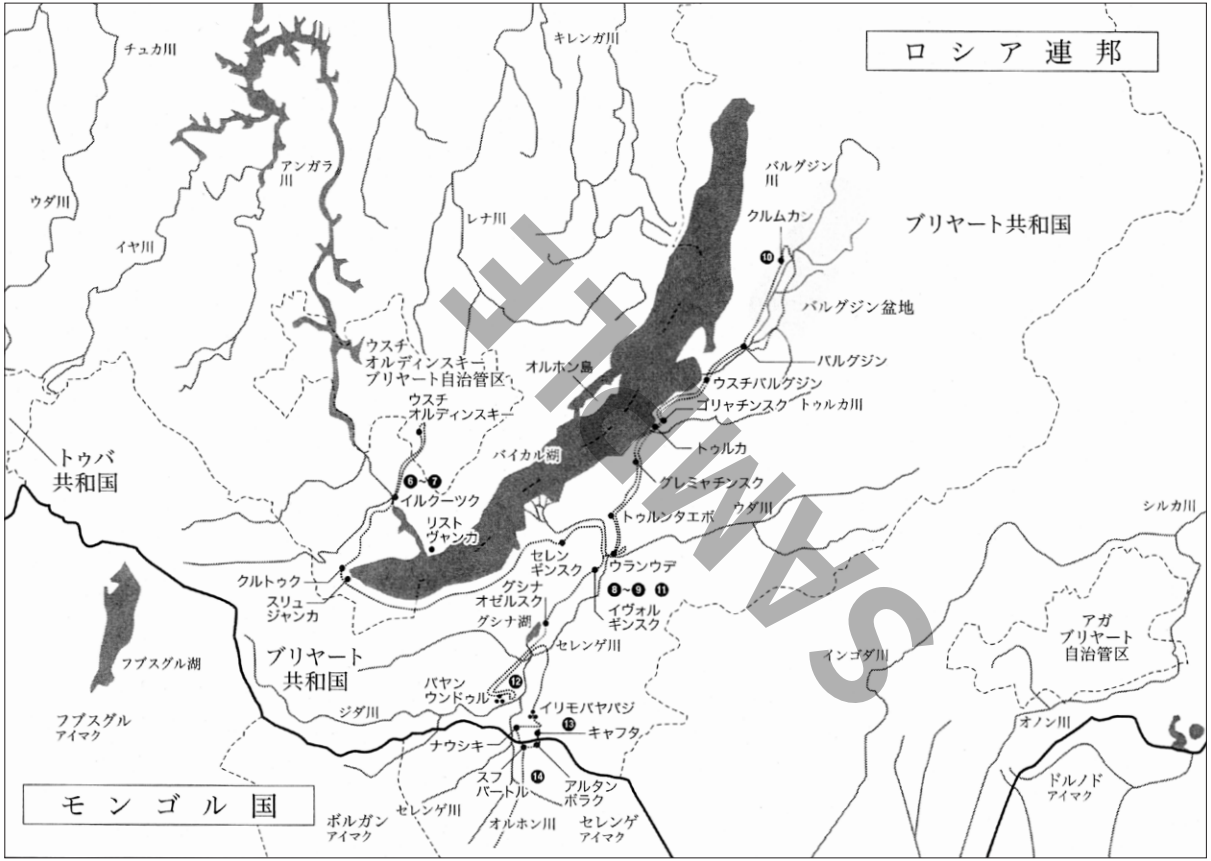


地図2　1995年8月における調査。秋原守著『体感するモンゴル現代史』(南船北馬舎、2009年) より転載。白ぬき数字は宿泊日、細い破線は行程を示す。

SAMPLE

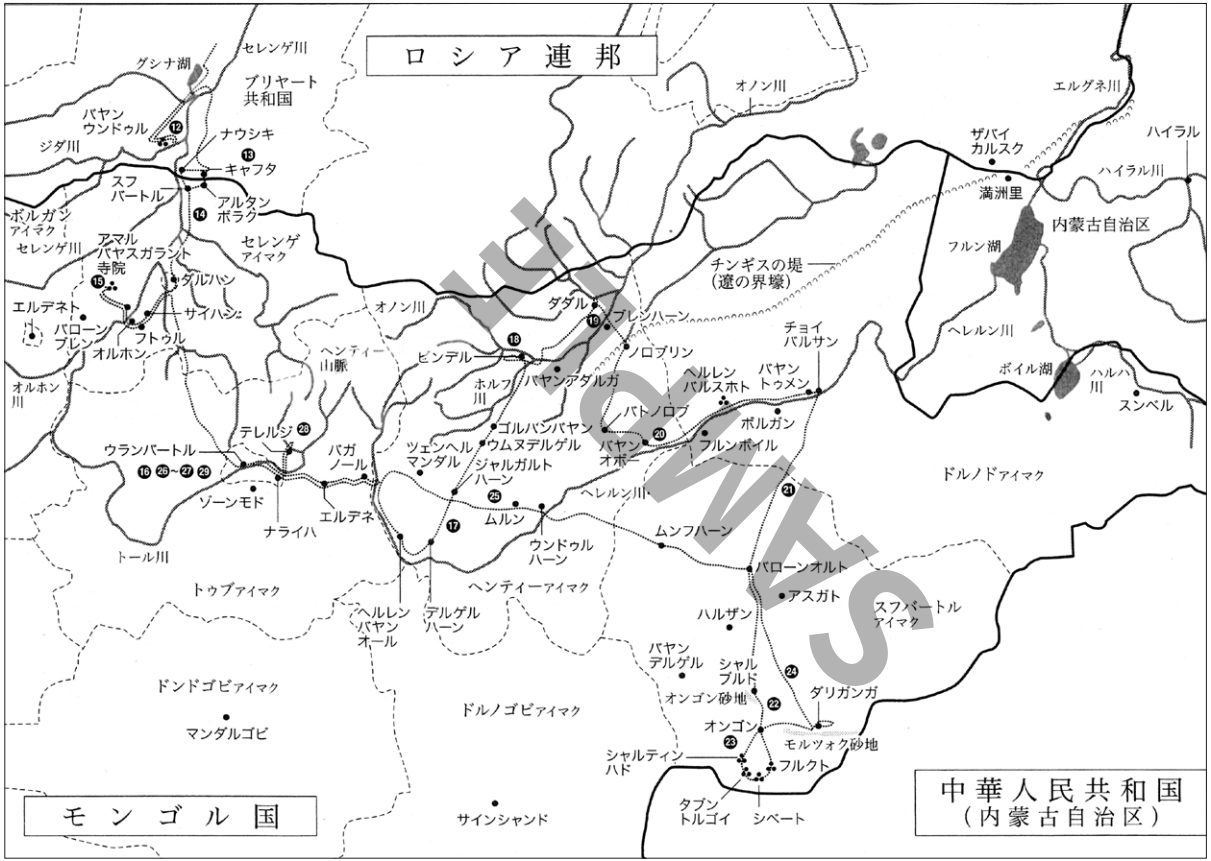


地図3　1996年8月における調査。萩原守著『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、2009年）より転載。白ぬき数字は宿泊日、細い破線は行程を示す。



地図4　1997年8月前半の調査ルート。萩原守著『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、2009年）より転載。白ぬき数字は宿泊日、細い破線は行程を示す。

SAMPLE



地図5　1997年8月後半の調査ルート。萩原守著『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、2009年）より転載。白ぬき数字は宿泊日、細い破線は行程を示す。

Hidwts